

バリ・ヒンドゥー教の人生儀礼

—生後3ヶ月の儀礼「トゥルブラニン」を中心に—

山口 しのぶ

1. はじめに

インドネシアは世界でもっとも多数のムスリムを抱える国家であるが、バリ島においては人口の約90パーセントがヒンドゥー教徒である。バリでは紀元8世紀から9世紀にかけてすでにインド文化が流入していたとされるが、11世紀のバリでは当時のワルマデワWarmadewa王朝のダルマウダヤナDharmodayana王が東ジャワの王女と結婚して以降「ジャワ化」が進み、シヴァ派のヒンドゥー教もジャワからバリに流入した。さらに14世紀東ジャワで成立したヒンドゥーのマジャパヒト王国が15世紀ムスリムの勢力に圧迫され、多くのヒンドゥー教徒たちがバリに移住し、現在のバリ・ヒンドゥー文化が形成されていった¹。

バリにおいては多くのヒンドゥー寺院が存在し、非常に頻繁に儀礼が行われる。多くの場合、「バンジャル」(バリ語、以下略号B. banjar)と呼ばれる共同体を中心に、供物の制作や当日の儀礼の運営などが行われる。一方、一般の家庭でも屋敷の内部に寺院があり、日常の儀礼や人生儀礼などが行われている。筆者は、2014年8月14日バリ中南部のギャニャール県において、一般家庭で行われる人生儀礼の一つであり子供の誕生後3カ月を祝う「トゥルブラニン」(B. telubulanin)を観察する機会を得た。本稿においては、トゥルブラニンの儀礼の概要と特色について述べていきたい。

¹ (山口 2002 :53) (山口 2003 :15)

2. バリ・ヒンドゥー教の人生儀礼トゥルブラニン

バリ・ヒンドゥー教の諸儀礼を分類するカテゴリーに、「パンチャ・ヤドニャ」(B. panca yadnya)がある。パンチャ・ヤドニャとは、(1) デワ・ヤドニャ (B. dewa yadnya, 神々への儀礼)、(2) マヌサ・ヤドニャ (B. manusa yadnya, 人生儀礼)、(3) ピトラ・ヤドニャ (B. pitra yadnya, 祖霊への儀礼)、(4) ブタ・ヤドニャ (B. bhuta yadnya, 悪鬼への儀礼)、(5) リシ・ヤドニャ (B. rsi yadnya, 僧侶の入門儀礼)の5つである²。これらの5分類は、古代インドの家庭経文献 (Skt. gr̥hyasūtra) や『マヌ法典』(3.67-121³) に述べられる「五大供犠」(Skt. pañcamahāyajña)、すなわちbrahmayaajña (ヴェーダ聖典の学習)、pitryajña (祖霊への供犠)、devayajña (神々への供犠)、bhūtayajña (生類への供犠)、manuṣyayajña (もしくはnṛyajña、客のもてなし)にその起源を持つと推測されるが、これらの概念がいつ、どのようにバリに伝播したのかは現在のところ明らかではなく、インドとバリではその内容も異なっている。

本稿で取り上げたトゥルブラニン儀礼は、バリのパンチャ・ヤドニャにおいてはマヌサ・ヤドニャに分類される。マヌサ・ヤドニャはいわゆる人生儀礼(通過儀礼)であり、人が誕生してから人生の次の段階に移行する節目ごとに行われる儀礼である。マヌサ・ヤドニャは、インドのヒンドゥー教の人生儀礼である「サンスカーラ」(Skt. saṃskāra)に対応する。しかしながらインドのサンスカーラが妊娠の儀礼から葬送儀礼までを含むのに対して、マヌサ・ヤドニャには妊娠の儀礼から結婚式までしか含まれず、サンスカーラに含まれる葬送儀礼はバリではピトラ・ヤドニャに含まれる。

バリのマヌサ・ヤドニャ⁴には妊娠3～4ヶ月目、生後42日目、生後105日目、生後210日目の儀礼、結婚前に犬歯を削る儀礼、結婚式などが

² (中村 1994 :46-47)

³ (渡瀬訳 1991 :90-98) 参照。

⁴ マヌサ・ヤドニャの種類については (Swellengrebel 1984 :57-58) 参照。

あるが、これらの儀礼はバリの暦であるウク (B. uku) 暦にしたがって行われる。ウク暦では7日を1ウク、30ウク (=210日) を1年 (1oton) とする。本稿で取り上げるトゥルブラニン⁵は生後105日目に行われる儀礼であるが、ウク暦では半年目にあたり、また太陽暦では約3カ月目にあたる。この儀礼の名称telubulaninはバリ語で「3ヶ月」を意味する。

トゥルブラニンは、人生儀礼の中でも非常に重要なものとされる。バリ・ヒンドゥー教徒の間では、子供は誕生以来3ヶ月までは天界の住人であり神に守られているが、トゥルブラニンの日に初めて地上に降り立ち、人間社会の仲間入りをされると考えられている⁵。また乳を飲んでいて乳児がこの日初めて飯を口にす、いわゆる「お食い初め」の儀礼でもある。インドのサンスカーラには、子供を初めて戸外に連れ出す儀礼 (Skt. niṣkramaṇa)、および「お食い初め」の儀礼 (Skt. annaprāśana) があるが⁶、バリのトゥルブラニンはこの両者を兼ね備えた儀礼とすることができるであろう。

次節ではバリのギャニャール県で行われたトゥルブラニンの次第を述べていこう。

3. トゥルブラニン儀礼の記録

2014年8月14日、バリ島、ギャニャール県チュルック在住のイ・クトゥット・ダルナI Ketut Darna氏⁷の家庭において、乳児の生後3ヶ月を祝うトゥルブラニンの儀礼が行われた。ダルナ氏はこの家の家長であり、この日の儀礼はダルナ氏の息子のイ・ワヤン・ルスディアルナ・エカ・プトラI Wayan Rusdiarna Eka Putra氏の息子の生後3ヶ月を祝う

⁵ (I Ketut Wiana 2001 : 266) では、赤ん坊の身体にアートマンを入れる儀礼であるとしている。

⁶ インドのサンスカーラの種類に関しては (kar 1990 : 17) および (Tachikawa, Hino, Deodhar 2001 : 93) を参照した。後者の文献では、古典文献に述べられる「耳に穴を開ける儀礼」(Skt. karṇavedha) に代って、近年ではniṣkramaṇaが行われているとしている。

⁷ ダルナ氏は金銀細工のアクセサリーの製造販売を家業としている。

ものであった。ダルナ氏の家庭では、儀礼の3日前から供物の準備がなされた。当日の儀礼は午前9時30分頃始まり、およそ2時間続いた。バリ・ヒンドゥー教においては、儀礼を執行する宗教者として2種が存在する。第1はバラモン階層出身のプダンダ僧 (B. pedanda)、第2は非バラモン出身で寺院の管理や儀礼を執行するプマンク僧 (B. pemangku) である。この日は、ダルナ氏の親族である女性のプマンクが儀礼をとり行った。

この儀礼は以下の次第で行われた。

<イ・クトウット・ダルナ氏の家庭で行われたトゥルブラニンの次第>

[1] 家庭寺院での準備的儀礼

- [1.1] 太陽への礼拝
- [1.2] 三神 (ブラフマ、ウィスヌ、シワ) および祖霊への礼拝
- [1.3] 5つの礼拝 (パンチャ・スンバ、B. panca sembah)
- [1.4] 神々、祖霊への供物の献供

[2] バレ・ダンギンでの中心的儀礼

- [2.1] 供物の浄化および祭壇 (B. pelangkiran) の神々への礼拝
- [2.2] 乳児と両親の浄化および祖霊の力の付与
- [2.3] 花とヤシ酒による悪鬼の慰撫
- [2.4] 祖霊への礼拝
- [2.5] アヒルとニワトリに触れること
- [2.6] 酒による悪鬼の慰撫
- [2.7] プニャンブタン供物 (B. penyambutan) の設置と浄化
- [2.8] 乳児の足を地面に触れさせること
- [2.9] 装飾品を身につけさせること
- [2.10] 石で乳児の額に触れること
- [2.11] 聖水をかけること
- [2.12] 祖霊への礼拝
- [2.13] 乳児を寝床に寝かせること
- [2.14] 祖霊の力を乳児に伝えること
- [2.15] 水による悪鬼の慰撫

[3] 共食

この日のトゥルブラニン儀礼は、大きく分けて家庭内の寺院で行われる準備的儀礼と、「バレ・ダンギン」(B. bale dangin) と呼ばれる屋敷の中央に位置する建物の中で行われる中心的儀礼からなる。

バリ・ヒンドゥー教徒の家庭には、経済状況などにより大小の違いはあるが、一般的に家庭寺院(屋敷寺「サンガ」、B. sanggah)がある(附録写真1)。これは日本の家庭にある仏壇や神棚に相当するが、規模はるかに大きく、寝室や台所などの他の部屋からは独立した場所にある。

バリ・ヒンドゥー教における方位は通常の東西南北と異なり、山側(あるいは川上)を「カジャ」(B. kaja)、海側(あるいは川下)を「クロッド」(B. kelod) と呼ぶ。島であるバリには中央に山脈が東西に走っており、そのうち最高峰のアグン山の方向をカジャといい、海をクロッドと言っている。したがって島のどこに位置するかで、カジャ、クロッドが逆の方角になる⁸。一方太陽が昇る方角は「カンギン」(B. kangin)、沈む方角は「カウ」(B. kau) と呼ばれ、家庭寺院は一般的に屋敷の「カジャ-カンギン」の方角に位置する。また家庭寺院にはいくつかの社があり、各々異なる神が祀られているが、中心となる社は「ムラジャン」(B. merajan) と呼ばれ、ブラフマ (B. Brahma, Skt. Brahmā)、ウイスヌ (B. Wisnu, Skt. Viṣṇu)、シワ (B. Siwa, Skt. Śiva) の三神と祖霊 (B. pitra, Skt. pitṛ) が祀られている。このような家庭寺院において、準備的儀礼は9時30分から9時50分頃まで行われた。

家庭寺院での準備的儀礼の後、バレ・ダンギンにおいて中心的儀礼が行われた。ここでは、この生後3ヶ月の儀礼に特有の「プニャンプタン」(B. penyambutan) と呼ばれる供物をバレ・ダンギンの入口前に置き、初めて乳児の足を地面に触れさせる行為が中心となる。

以下に、この儀礼のプロセスを述べていこう。

[1] 家庭寺院 (B. sanggah) での準備的儀礼

儀礼が始まる前に、この日の儀礼の準備を行っていた女性たちにより、供物が家庭寺院の境内に運び込まれる(写真2)。この時の供物は、子豚の丸焼き (B. babi guling)、アヒルの丸焼き、菓子類、「プラサジャ

⁸ (中村 1994 :39-40)

ガン」(B. prasajagan) と呼ばれる数種類の供物が組み合わせられたものなどであった。

[1.1] 太陽への礼拝

はじめに、プマンクは右手に花、左手に線香を持ちながら、太陽への礼拝の文言を唱える。その際、介添の女性が右手に「アラク」(B. arak) と呼ばれる酒、左手にヤシで作った酒 (B. berem) が入った瓶を持ち、それらの酒を地面に注ぐ。介添人はかごに入った一片の花をプマンクにわたす。その後プマンクは聖水の入った水を介添人に渡し、介添人は聖水を地面に注ぐ。プマンクは介添人から受け取った花を聖水に浸し、自身の前に置かれていた儀礼の道具が入られた容器を自身の右側に置きなおし、花についた聖水を振りかけて浄化する。次に、いま一人の女性が介添人から二種の酒の入った瓶を渡され、儀礼の道具が置かれた付近の地面を瓶の酒で浄化する。その後両親が乳児を抱いて儀礼の場に連れてくる。彼ら3名は、さきほど女性が酒で清めた場所にすわる。

[1.2] 三神(ブラフマ、ウイスヌ、シワ) および祖霊への礼拝

両親はプマンクから受けとった花を乳児ににぎらせる。その後、プマンクは文言を唱えながら、「リス」(B. lis) と呼ばれるほうき状の道具を振り、文言を唱えてサンガの中心的神々、すなわちブラフマ、ウイスヌ、シワの三神や祖霊に礼拝し、彼らの力を乳児に送る。両親も手を揺らしながら、同様に神々や祖霊の力を乳児に送る。この行為はバリ語で「ナタブ」(B. natab) と呼ばれる。続いてプマンクは左手に線香、右手に赤い花の入った聖水のカップを持ち、花をカップから取り出し、乳児に聖水をふりかける。その後プマンクは乳児の額に米を付け、また線香に点火し、供物の上に載せる。その後乳児の母親も線香に火をつけ、供物に差し込む。

[1.3] 5つの礼拝(パンチャ・スンバ、B. panca sambah)

線香の献供の後、「パンチャ・スンバ」が始まる(写真3)。「パンチャ」は「5」、「スンバ」は「礼拝」を指し、「パンチャ・スンバ」は「5つの礼拝」を意味する。本稿で取り上げたトゥルブラニン儀礼では、プマ

ンクと儀礼に参加したメンバー全員がこの礼拝を行っていた。第1の礼拝では、礼拝者は手に何も持たずに両手を合わせて額の高さに挙げ礼拝する。第2の礼拝では、手に白い花を持ち、シワ・アーディティヤ (B. Siwa Āditya) としてのサンヒャン・ウィディ・ワサ (Sang Hyang Widhi Wasa, バリ・ヒンドゥー教の最高神) に礼拝する。第3の礼拝では花を手に持ち、自分の思い思いの神 (B. Iṣṭa Dewatā)、もしくはサンガの神々を礼拝する。第4の礼拝においては、Bhatara Samodaya神とサン・ヒャン・ウィディ・ワサに礼拝がなされ、最後の第5の礼拝では、最初の礼拝と同様手に何も持たず年月に対して感謝の意を捧げ礼拝する⁹。その後儀礼に参加したメンバーは、プマンクから聖水と米粒 (B. bija) をもらう。このパンチャ・スンバは本稿の儀礼においてのみならず、寺院において広く行われる一般的な礼拝方法である。

[1.4] 神々、祖霊への供物の献供

家庭寺院での礼拝はパンチャ・スンバで締めくくられ、その後供物として置かれた焼いた子豚 (B. babi guling) の首が切り落とさる。その頭はサンガの神々と祖霊に捧げられ、身体は後で儀礼に参加したメンバーに振舞われる。

[2] バレ・ダンギン (B. bale dangin) での中心的儀礼

家庭寺院での準備的儀礼が終了した後、豚やアヒル、その他の供物は家庭寺院の境内から、中心的儀礼の行われる場であるバレ・ダンギン (写真4) に運ばれ、奥に掛けられた、すでに亡くなった親族の写真の前に置かれる。一方女性たちにより、素焼きのボウル状の容器に水が張られ、その中に花や葉、アヒルの卵が入れられる。さらにその中に腕輪や指輪、ペンダントなどが入れられる。これらのアクセサリーは、後に乳児に身につけさせる。その後プマンクはバレ・ダンギンに移動し、中心的儀礼が始まる。

⁹ 以上のパンチャ・スンバの手順に関しては、(Suhardana 2008:17-31) を参照した。

〔2.1〕 供物の浄化および祭壇の神々への礼拝

はじめにプマンクは、文言を唱えながら、バレ・ダンギンの内部の左側にある「ブランキラン」(B. pelangkiran) と呼ばれる祭壇に花を供えて礼拝する¹⁰。ここでは、ブランキランに住すると考えられるクマラ神(B. Kumara) が礼拝の対象である¹¹。その後儀礼に参加した他の女性も線香を持ち、ブランキランに礼拝する。また他の2名の女性が、各々生きたアヒルとニワトリをたずさえ、バレ・ダンギンに運び込む。これらのアヒルとニワトリの片足には、中国の古銭のレプリカ¹²が糸で付けられている。さらにプマンクは、リスを振りながらブランキランに礼拝し、その後花と線香を持ち、真言を唱えて礼拝する。それから文言を唱えて聖水を供物に振りかけ、供物を浄化する。

〔2.2〕 乳児と両親の浄化および祖霊の力の付与

プマンクが供物を聖水で浄化した後、両親が乳児を抱いてバレ・ダンギンの中に入り、中央の座に坐る。父親は、バリの男性が身につける白い帽子を乳児に被せる。はじめにプマンクは、赤い花を手に持ち、乳児の前にかざしながら文言を唱える。それからプマンクは乳児の手に花を持たせた後、乳児の目の前でリスを揺り動かし祖霊の力を送る。

その後プマンクは聖水の容器を手に取り、花を聖水に浸し、その花を振って花についた聖水を供物に振りかけ再び供物を浄化する。その後、供物を浄化したものと同一の聖水に再び同じ花を浸し、乳児と両親およ

¹⁰ ダルナ氏によれば、pelangkiranはこの儀礼以外にも満月の際などに礼拝されるところである。

¹¹ 元Parisada Hindu Dharma Indonesia Pusat事務総長のI Ketut Wiana氏のご教示による。クマラ神はシヴァ神の息子Kumāra (Kārtikeya) のことであり、バリ・ヒンドゥー教においては、生後3カ月以前には子供はクマラ神に守られていると考えられている。

¹² ダルナ氏によると、この中国の古銭のレプリカは儀礼に使用するためのもので、儀礼の道具を売っている店で買ったとのことである。また、デンパサール・ヒンドゥー大学の大学院生I Wayan Joni Artha氏によれば、かつてバリ、デンパサールの王が中国の王女と結婚したという伝承があり、その関連で中国の古銭が使用されるという。またバリ島内の寺院においても、壁面に中国の開元通宝が描かれていることがあり、バリと中国との関連が窺われる。

びその場にいた家族の頭上に聖水を振りかける（写真5）。その後、両親や家族のメンバーは右手を出し、プマンクから聖水を手のひらに注いでもらい、その聖水を飲む。乳児には、母親の手のひらから聖水を飲ませる。最後には母親が聖水で乳児の頭を浄化し、プマンクは乳児の額に米粒を付け、また頭上に白い糸（B. benam）を十字の形で載せる¹³。

それからプマンクは文言を唱えながら供物に向かってリスを振り、その供物の一部を取り、乳児の頭上にかざして、文言を唱えながら供物に宿る祖霊の力を乳児に送る。両親も手を揺らしながら祖霊の力を乳児に送り込む。

[2.3] 花とヤシ酒による悪鬼の慰撫

乳児および両親が聖水により浄化され、祖霊の力が乳児に付与された後、プマンクは先の家庭寺院での儀礼に使用されたものと同じヤシ酒の入った容器を手に取り、バレ・ダンギンの建物の前の庭に向かい、赤い花びら一片を庭に落とし、ヤシ酒をそこに注ぐ。これは儀礼の邪魔をする可能性を持つ悪鬼（B. bhutakala）たちに花とヤシ酒を供物として捧げて慰撫し、儀礼の邪魔をしないよう頼む行為であると考えられる。

[2.4] 祖霊への礼拝

プマンクが悪鬼に対して供物を供えている間、他の女性たちはバレ・ダンギンにあった豚やアヒルの肉が入った供物を外に持ち出す。バレ・ダンギンの内部左側には祭壇プランキランのほか、奥の上部に、この一族ですでに亡くなった男性と女性¹⁴の写真が1枚ずつ掲げられている。プマンクは自身の手前に花、聖水、中国の古銭のレプリカなどが入れられた容器を置き、右手に花を持ちながら、2枚の写真に向かって文言を唱える。その後プマンクは左手に線香、右手にリスを持ち、再び写真に向かって文言を唱え、その後聖水を振りかけ、合掌する。この行為

¹³ ダルナ氏によれば、十字の縦糸は乳児と祖先との関係、横糸は乳児と現世の家族、社会との関係を意味するという。

¹⁴ ダルナ氏によれば、女性は氏の母親、男性は6年前に亡くなった氏の兄とのことである。

は一族の2名の故人の写真に向かって行われるが、実際は祖先の霊全体に対して行われているものと思われる。乳児とその両親は、バレ・ダンギンにおいてプマンクの後ろに坐っているが、この時には特段の行為は行っていなかった。

[2.5] アヒルとニワトリに触れること

プマンクによる祖霊への礼拝が終了した後、バレ・ダンギンに、女性たちにより生きたアヒルとニワトリが連れてこられる。プマンクは2名の女性がそれぞれ持ったアヒルとニワトリの前に線香をかざし、右手のひらもかざしながら文言を唱える。その後プマンクは、アヒルとニワトリの背に米粒を載せる。これら一連の行為はアヒルとニワトリを儀礼の場にふさわしいように浄化・聖化する目的を持つと考えられる。

その後プマンクは、アヒルとニワトリに向かってリスを振りながら文言を唱え、2羽を持った女性たちはそれぞれ手を揺らしてナタブを行い、プマンクは次に乳児に対してもリスを振る。その後アヒルとニワトリに聖水を振りかけ、乳児に対しても同じ容器から聖水を頭上に振りかける。次に米粒が先にニワトリとアヒルの背に、続いて乳児の頭上に載せられる。さらに乳児の母親がプマンクに渡した糸の切れ端が、先にニワトリとアヒルの背に、続いて乳児の頭上に載せられる。すなわちここでは、いくつかの行為がアヒルとニワトリ、乳児の順で交互に行われている。この後プマンクは、糸を乳児の手首に巻きつける。

この時母親に代って祖母が孫の乳児を抱いて座に坐っていたが、上記の行為の後プマンクは祖母の手のひらに飯粒を載せ、祖母が飯粒を乳児の口元に持って行くのと同時に、プマンクがアヒルを抱いてそのくちばしを乳児の口元に近づける(写真6)。続いてプマンクは、ニワトリの足を飯粒が置かれた祖母の手のひらに触れさせ、手のひらの上でニワトリの足を動かす。

トゥルブラニンの儀礼は、乳児が初めて地面に足をつける儀礼であると同時に、初めて固形物を食す儀礼でもある。ここでアヒルとニワトリが登場するのは、バリではアヒルはゴミの中からでも食物を見つけることができ、またニワトリは地面の塵を蹴散らしてきれいにするからであるとされる¹⁵。いずれにしても、この行為は今後乳児が食べ物に困らな

いように、という意味合いを持つと考えられる。

その後プマンクは、小ぶりの供物の容器に黄色く着色した生米、葉の上に載せられた炊いた飯、中国古銭のレプリカなどを入れる。この供物の容器は後に使用されるプニャンブタン供物の下に置かれる。その後プマンクはリスを振り、故人の写真の前に置かれた供物に文言を唱えながら礼拝し、[2.2]で使用されたものと同じ供物を乳児の頭上にかざし、祖霊の力を乳児に送る。両親も手を振りながら、ナタブを行う。

[2.6] 酒による悪鬼の慰撫

その後プマンクは再び中庭に花とヤシ酒を撒き、悪鬼に捧げ慰撫する。ここで悪鬼の慰撫の行為が行われるのは、悪鬼たちに中庭で行われる次の行為の邪魔をさせない、という目的を持つと考えられる。

[2.7] プニャンブタン供物の設置と浄化

悪鬼に対する供物の献供の後、プマンクはさきほど準備した、水が張られ中に花や葉、アヒルの卵、腕輪や指輪、ペンダントなどが入れられた素焼きのボウル状の容器を、中庭のバレ・ダングンのすぐ前に設置する。次にプマンクと乳児の祖母とが「プニャンブタン」(B. penyambutan)と呼ばれる大ぶりの供物¹⁶を先のボウル状の容器の上に置く(写真7)。¹⁵ ‘penyambutan’とは、インドネシア語の‘sambut’(「歓迎する」の意)の派生語で、ここでは今まで天界に住んでいた乳児が、地上に人間として降りてくる事を歓迎するための供物と考えられており、「トリムルティ」、すなわちブラフマ、ウイスヌ、シワに捧げられる。

次にプマンクは、葉で作られた容器に赤、青、黄、ピンクの花と葉、中国古銭のレプリカと現行のインドネシア・ルピアの紙幣を入れた供物をプニャンブタン供物のそばに置き、傍らの地面に線香を指す。これは大地の女神プルトゥウイ(B. Ibu Pertiwi)に捧げるための供物である。

¹⁵ ダルナ氏およびI Wayan Joni Artha氏のご教示による。

¹⁶ ここで使用されたプニャンブタン供物は、竹製の輪っば状の容器の上に、米、花、菓子などが入れられたヤシの葉などを編んだ容器や、ヤシの実、中国古銭等々さまざまな供物からなる。(Ida Ayu Putu Surayin 2002:30-32)にはプニャンブタン(ここではsambutanと記されている)の供物のリストがある。

プマंकがプニャンブタン供物を用意している間に、両親は乳児を抱きかかえて、バレ・ダンギン入り口の階段上にプニャンブタン供物に対して正面を向いて坐る。両親の足元には悪鬼に対する供物 (B. seghan) が2つ置かれる。プマंकはプニャンブタン供物にヤシの葉を束ねたものと青い花を置き、さらに聖水を振りかける。この場にはプマंक以外に介添えの女性が3名いたが、彼女らは動物の頭が付いた容器に入れた酒 (アラクとヤシ酒) を地面に落していた。

[2.8] 乳児の足を地面に触れさせること

その後、プニャンブタン供物は介添えの女性によって儀礼の場から撤収され、その下にあった水の中に花、葉、アヒルの卵、腕輪や指輪などのアクセサリーが入れられた容器のみが残された。プマंकは乳児を抱きかかえ、水が張られた容器から白い花を取り、地面に落とす。次にプマंकは乳児の足を3回地面に触れさせる¹⁷ (写真8)。この行為は、それまで天界で神に守られていた乳児が初めて人間世界に足を踏み入れたことを意味する。

[2.9] 装飾品を身につけさせること

乳児の足を地面に3回触れさせる行為の後、父親が乳児を支えながら、プマंकが、親子の前に置かれた水の中に供物やアクセサリーが入れられた容器に乳児の両手を入れて洗わせる。それから母親と祖母が金の輪を水から取り出し、乳児の両手首と両足首にはめる。父親は水から指輪を取り出し、乳児の左右両方の薬指にはめる。一方プマंकは、容器の水の中からアヒルの卵と中国古銭を取り出し、乳児の右手、左手に順番に触れさせる。

次にプマंकは再びプニャンブタン供物を水の張った容器の上に戻し、そこから黄色の生米と糸を取り出し、一緒に乳児の頭上に付け、また額と左右の耳に黄色の生米を付ける。その後プマंकはヤシの葉に花と葉などを入れた小さい供物を乳児の前にかざし、文言を唱える。この

¹⁷ デンバサール・ヒンドゥー大学講師I Ketut Donder氏によれば、この行為はバリ語でtedaksitiと呼ばれる。

時両親は、ナタブを行って乳児に神々の力を送る。

[2.10] 石で乳児の額に触れること

続いてプマンクは、丸い石で地面とプニャンブタン供物の木杵を交互に数回たたき、それから同じ石で乳児の額に触れる（写真9）。家長のダルナ氏によれば、石で乳児の額に触れるこの行為は、神々の霊や祖霊を呼びさまし、彼らに乳児の守護を保証してもらうために行われるという。

[2.11] 聖水をかけること

以上の行為の後、プマンク、両親および乳児は、再びバレ・ダンギンの建物に戻る。プマンクは右手に花、左手に線香を持ち、文言を唱えながらプランキランに礼拝する。続いてプマンクはバレ・ダンギンの供物台上に子供用の枕2つとシーツを置く。それからプマンクは左手に線香、右手に花を持ち、文言を唱えながらそれらを乳児の前にかざし、花で乳児の両手首に触れる。その後聖水の容器をとり、花びらで聖水をすくいながら供物に振りかけた後、乳児にも聖水を振りかける。一方父親は右手で聖水を乳児に飲ませる。最後にプマンクは乳児の額に黄色の生米を付け、頭上に糸を載せた後、新たに糸を手首に巻く。

[2.12] 祖霊への礼拝

プマンクはその後、右手に花、左手に線香を持ちながら、文言を唱えて祖霊に対して礼拝し、両親は手を揺らしてナタブを行い、祖霊の力を乳児に送る。

[2.13] 乳児を寢床に寝かせること

続いて祖母が先に用意されていた儀礼用のシーツを供物台上に敷き、枕2つを配置する。父親が乳児を抱き上げ、プマンクが乳児の口に一口ほどの飯を含ませ、飯の一部を床に落としてから¹⁸、乳児を供物台上の寢床に寝かせる（写真10）。

[2.14] 祖霊の力を乳児に伝えること

その後乳児は両親とともに、バレ・ダンギン中央の座に戻って椅子に坐る。プマンクは[2.2]で使用した供物と中国古銭を手にとり、乳児の前でかざし祖霊の力を再び乳児に伝える。両親は以前と同様に手を揺らしてナタブを行い、祖霊の力を乳児に伝える(写真11)。

[2.15] 水による悪鬼の慰撫

乳児と両親は儀礼が行われていたバレ・ダンギンの建物から外に出る。儀礼の結びとして、プマンクはバレ・ダンギン前の中庭の地面に花と水を落とし、悪鬼たちを慰撫する。

以上で中心的儀礼が終了した。

[3] 共食

儀礼が終了した後、この日の儀礼に参加したメンバーが昼食を共にする。食事は飯、野菜の炒め煮、豚の丸焼き等である。これらの食物は、この日の儀礼において神々や祖霊に捧げられた供物のお下がりであり、これらを食すことは神々のエネルギーを受け取るという意味を持つ。人々は屋敷の後ろにある庭に集まり、思い思いの場所に坐り、談笑しながら食事をする。

¹⁸ 床に落とされた食物の一部は、「カンダ・ウンパット」(B.Kanda EmpatもしくはKanda Mpat)の取り分とされている。「カンダ・ウンパット」とは、バリ・ヒンドゥー教において人が生まれてから常にその人が連れている4名の兄弟もしくは姉妹のことで、誕生時に付随してくる4種の物質、すなわち(1)羊水、(2)血、(3)胎脂、(4)後産(胎盤、羊膜)が擬人化されたものである。バリでは子供の誕生後、胎盤がその親の寝室の入り口の外側の土中に埋められ、石をその上に被せて蓋をする。母親は初めての授乳の数滴をカンダ・ウンパットのために床に落とし、離乳の後は米を落とすといわれる。また「カンダ・ウンパット・ブタ(bhuta)」という通常のカンダ・ウンパットとは異なる種類があり、各々Anngapati, Mrajapati, Banaspati, Banaspati Rajaと呼ばれる。カンダ・ウンパットに関しては、(Hooykaas 1973: 4) (Eiseman 1990: 100-107)に詳しい。またバリの写本に言及されるカンダ・ウンパットについての詳細な研究が(Hooykaas 1974: 93-128)にあり、そこにおいては、ある写本はカンダ・ウンパットと五大要素(Skt. pañcamahābhūta)とを関連付けて言及しているとのことである。

4. 結び

以上、バリ・ヒンドゥー教における子供の生後3ヶ月の儀礼トゥルブラニンについて述べてきた。トゥルブラニン儀礼は前半の家庭寺院における準備的儀礼とバレ・ダングンにおける中心的儀礼の2つの部分からなる。前半の儀礼では、儀礼に参加するメンバーが家庭寺院に住すると考えられる神々や祖霊に礼拝し自分たちを浄化するとともに、次の中心的儀礼を行うためのエネルギーを礼拝対象から受け取る。

続く中心的儀礼においては、主役である乳児は祖霊から力を付与され、アヒルやニワトリなどバリでは馴染みの深い生き物との食物に関わる出会いの行為、地面を足で触れる行為、装飾品を身につける行為、一人で寝床に寝る行為など、いくつかの象徴的な行為を経験し、次第に「天界に住む赤ん坊」から「人間社会の子ども」に変化する。しかしながら、地上の人間社会にあっても神々の保護を受け続けるための保障を得ることを目的とする、石で乳児の額に触れる行為も含まれており、この儀礼にはバリ・ヒンドゥー教徒の人生における人と神々の関わりが明確に示されていると考えられる。

本稿においては主に儀礼のプロセスについて述べたが、プマンクが唱える文言については今後の調査・研究課題である。バリ・ヒンドゥー教の儀軌は版本が数多く出版されており、その中には儀礼で使用される文言や神々、祖霊への讃歌 (stava) などが含まれている。それらはサンスクリット、バリ語などが混在しており、またその時々で唱える言葉も変化するといわれる。今後はそれらの文献の内容分析やプマンク、プダングへの聞き取り等を通じて、儀礼に現れる文言などの内容についても明らかにしていきたい。

参考文献

(日本語文献)

- 中村 潔 1994 「バリの儀礼と共同体」『神々の島バリーバリ＝ヒンドゥーの儀礼と芸能』(吉田禎吾監修、河野亮仙・中村潔編)、春秋社、pp.33-58.
山口しのぶ 2002 「バリ・ヒンドゥー教の神々」『中京女子大学アジア文化研

究所論集』4 :53-100.

- 山口しのぶ 2003 「バリ・ヒンドゥー寺院の神像について—バトゥプラン・プサ寺院の事例報告」『密教図像』22 :15-27.
 渡瀬信之訳 1991 『マヌ法典』中公文庫.

(外国語文献)

- Eiseman Jr., Fred B. 1990 *Bali Sekala and Niskala*, Tuttle, Singapore.
 Gordrian, T, Hooykaas, C 1971 *Stuti and Stava*, North-Holland Publishing, Amsterdam.
 Hooykaas C. 1973 *Religion in Bali*, E.J.Brill, Leiden.
 Hooykaas C. 1974 *Cosmogony and Creation in Balinese Tradition* (Bibliotheca Indonesica 9), Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-, en Volkenkunde, The Hague.
 Ida Ayu Putu Surayin 2002 *Manusa Yajña*, Pāramita, Surabaya.
 I Ketut Wiana 2001 *Makna Upacara Yajña Dalam Agama Hindu I*, Pāramita, Surabaya.
 Kar, G.R.Sholapur 1990 *Religious Rites and Festivals of India*, Bharatiya Vidya Prakashan, Varanasi.
 Suhardana, K.M. 2008 *Pūjā Tri Sandhyā, Kramaning Sembah, Kidung Dewa Yajña*, Pāramita, Surabaya.
 Swellengrebel, J.L. 1984 Introduction, *Bali, Studies in Life, Thought, and Ritual*, Foris Publication, Dordrecht, pp.3-76.
 Tachikawa, Musashi, Hino, Shoun, Deodhar, Lalita 2001 *Pūjā and Saṃskāra*, Motilal Banarsidass, Dehli.

(60)

(附 録)

2014年8月14日イ・クトゥット・ダルナ氏宅で行われたトゥルブラニン儀
礼の写真

(注 : 以下の写真 1 - 11 は、すべて2014年8月14日に筆者が撮影したもので
ある。)



写真 1 I Ketut Darna 氏宅の家庭寺院



写真2 家庭寺院の境内に置かれた供物。子豚とアヒルの頭はムラジャンの社に向けて置かれる。



写真3 パンチャ・スンバを行う家族のメンバー



写真4 中心的儀礼が行われる場バレ・ダンギン



写真5 プマंकは乳児と両親に聖水をふりかける。



写真6 プマंकはアヒルのくちばしを乳児の口元に近づける。



写真7 プニャンブタン供物を運ぶ乳児の祖母（左はプマंक）。中央下方に見える容器には水が張られ、アヒルの卵や花、アクセサリ類が入れている。



写真 8
地面に足を触れる乳児



写真 9 プマंकは乳児の額に石で触れる。



写真10 バレ・ダンギン内部の供物台上の寝床に寝かせられた乳児



写真11 プマंकは供物をかざして祖霊の力を送り、両親はナタブを行う。